

Joseph Conrad : *Victory* における Involvement と Detachment について

伊 藤 治 男*

On Involvement and Detachment in *Victory* by Joseph Conrad.

Haruo Itô

要 旨

この小論は、Joseph Conrad の 後期の代表的長編小説、*Victory* に於ける involvement (巻き込むこと) と detachment (離脱) の思想を中心に、作品の分析を試み、作者の思想を解明しようとするものである。

Synopsis

This article intends to analyze Joseph Conrad's novel, *victory*, which is one of his masterpieces in the latter period, chiefly through his thought of *involvement* and *detachment*, and also tries to clarify his thought by the analysis.

I

コンラッドは1912年 *Chance* を書き終った後すぐ、彼の後期の長編小説 *Victory* の執筆に取りかかり、1914年の初夏に完成をみたのであった。この四部からなる小説の舞台は、すでにコンラッドの多くの作品の舞台となってきたマレー群島である。

さて、この小論の題として取り上げた detachment (離脱) と involvement (巻き込むこと) のこの二つの相反する概念は、彼の代表作と考えられる *Lord Jim* (1899) に於いても、又 *Under Western Eyes* (1910) に於いても扱われているのであり、又 *Victory* に於いてさらに色濃くこの問題が提起されていると思われる。Author's Note に於ける次の言葉、すなわち、

What influenced my decision mest were the obscure promptings of that pagan residuum of awe and wonder which lurks still at the bottom of our old humanity.¹⁾

と云う表現から考えても、現代の文明世界からの detachment と云う思想が生じて来ることは容易に想像されるし、又、

Thinking is the great enemy of perfection. The habit of profound reflection, I am compelled to

say, is the most pernicious of all the habits formed by the civilized man.²⁾

と Author's Note の中で述べていることから考えても、多分に、この小説の主人公である Heyst 的な性格が現代文明化社会の一般的な傾向であると見ていたと思われる。この視点に立って detachment と involvement の問題を追求することは、この作品の現代的な意味を考える手がかりになると思われる。

コンラッドの作品に直接触れる前に、彼の生い立ちに目を向けたい。そうすることによって、一層 detachment と involvement の問題を把握し易くなると思われるからである。

彼は1857年12月3日、東ポーランドのベルデュツェフ (Berdycew) と呼ぶ村で、相当の地主階級の一人息子として生まれた。父方のコジェニオフスキー (Korzeniowski) 家も、母方のボブロフスキー家 (Bobrowski) も共に地主層であつたが、父方の血はなかなか情熱的、浪漫的な人物を多く出していることがまず注目される³⁾、祖父のテオドール (Theodor) はひどく勇ましい軍人氣質の愉快な人物だったが、生活能力はあまりない夢想家で、上層地主階級とはいっても、この代頃から浪費で、資産は傾いてきたらしい。父アポロ (Apollo) の代は男兄弟が多かつたが、それらの中の二人が1863年の反露蜂起に加担して、一人は戦死、一人はシベリア流刑になって、その地で病死している。ア

* 講師 一般教科

ポロも又、熱烈な愛国の志士だった。その当時のポーランドを取りまく国際状況は、ロシア、オーストリア、プロシアの烈強に囲まれ、ポーランドは、それら烈強の好餌となり、この三国に分け奪られていて、ポーランドと云う国家は存在していなかつたのであり、したがって、ポーランド国民の歴史は、まさしく領有国への反抗の歴史と いってよかつたのである。そして父アポロはペテルスブルグ大学にまで学んだことのあるインテリだつたが、帰国するや、たちまち、急進独立論の指導者の一人となり、1862年には彼の属する政治秘密結社が摘発を受け彼も北ロシアへの流刑を申し渡された。当時、コンラッドは五才足らず、母ヴェリーナ (Evelina) と共に父に伴って、流刑の地、モスクワのはるか北、緯度はほぼレーニングラードと同じ極寒の地へ移り住んだのである。しかし、弱かつた母は、たちまち病に犯され、南のウクライナ地方に流刑地は移されはしたものの、1865年、母死亡、時にコンラッド七才であつた。その後、彼は叔父に引き取られ、父の流刑はその後もつづくが、やがて父も結核にかかり、オーストリア領ポーランドのガリシアに移住が認められる。ここで、コンラッドは、父と一諸に住むことになるが、それも三年あまりしか続かず、1869年、父も死亡、時にコンラッド十一才であつた、以後コンラッドは、主として母の弟タデウス、ボブロフスキー (Thaddeus Bobrowski) の世話になり、父在世中からの教育をひきつづき受けるのであるが、身体も丈夫でなく、転々とした日々を送るのである。そして十四才の1872年、突然叔父に、般員志望を打ち明け、約二年間の説得の後、反対していた叔父もついに折れて、1874年十六才の時、たつたひとりでマルセーユへ出発する。フランス船に乗り組む手づるが一方では進められていたのである。十六才の少年の般員志願については、それ程深い政治的、社会的動機はなかつたようである。只浪漫的な海へのあこがれ、又は自由を求める少年の情熱と云ふことのものである。さて祖国を脱したコンラッドは1874年12月、フランス般に乗り組んでから、1894年1月、約20年間船員生活を送るのであるが、フランス船時代は最初の三年半ぐらいい、1878年4月、たまたまイギリス船に乗り組んで以来、イギリス船に乗るようになるのである。身分は下級船員から段々と試験にパスし、1886年には船長の資格に合格している。そしてその年に待望のイギリス国籍が興えられている。以上が、コンラッドが作家になる迄の極めて大ざっぱな略歴であるが、作品の中に表われて来る種種の問題が、彼の祖国ポーランドからの脱出とからんでくるだけに彼の伝記的研究も又、大いに意義のあることでは

あるが、定説となっている伝記的事実のみにして、この論の本題へと進みたい。

II

さて *Victory* の主人公ヘイスト (Heyst) の性格の解明から論を進めて行きたいと思う。

十数年前、ススバヤの貿易商テスマン (Tesman) のところへ紹介状をもって、ふらりと現われたヘイストが、たちまち東洋の島々の魅力のとりこになって、そのまま居ついてしまったと云つても、彼はひとつ土地に定住してしまつたわけではなかつた。

Roughly speaking, a circle with a radius of eight hundred miles drawn round a point in Noruh Borneo was in Heyst's case a magic circle.⁴⁾

と云うようになんか広い範囲が彼の活動の場であつた。活動といつても、金儲けをたくらんでいたわけではなく、ただ「事実」の発見に興味がある様子だつた。それはテスマンとの会話の中で、次のようなやりとりがある。

“And you are interested in ——?”

“Fact,” broke in Heyst in his courtly voice.

“There's nothing worth knowing but facts. Hard facts! Facts alone, Mr. Tesman.”⁵⁾

以上の会話から「冷厳な事実のヘイスト」とか、“Enchanted Heyst”⁶⁾とか“Utopist”⁷⁾と呼ばれて、好奇の眼をもって見られていたのである。その事実を知ることにはしか興味を持っていなかつたヘイストがある日、困り果てていたモリソン (Morrison) を経済的に助けてやると云う事態が生じ、その結果、恩義を感じたモリソンが、ヘイストを「熱帯石炭会社」へさそい込んだのである。モリソンは資金調達のためロンドンへ於立つが、資金調達は思うように行かず、ロンドンで病死し、会社も資金難から解散してしまうのである。

ここで何故、事実を知ることにはしか興味を持たなかつたヘイストが、そのような事態の中に身を投じたかと云う疑問が生じるが、それには、ヘイストに多大な影響を興えた彼の父について考察を加える必要がある。彼の父は盛時、思想家であり、文人でもあつた。ヘイストが十八才で学校を卒業した後、三年間、父親と共に暮し、当時、父親は最後の著作を執筆中であったが、その著書の中で父親は、絶対的な知的、精神的自由の権利を人類のために要求していた。しかし彼は人類がこの権利に価するものとは考えていず、ヘイストは、人生に対する不信の念を植えつけられたのである。⁸⁾ 又、臨終の床にある父の教えとは、次のような

ものであつた。

“Is there no guidance?”

と尋ねるヘイストに対して、

“—, I advise you to cultivate that from of contempt which is called pity. It is perhaps the least difficult — always remembering that you, too, if you are anything, are as pitiful as the rest, yet never expecting any pity for yourself.”⁹⁾

そして今はのきわに、

“Look on — make no sound.”¹⁰⁾

と云うせりふを残して息絶えるのである。つまり「あわれみという形をとつた軽蔑の気持」から、モリソンに対して援助したものと思われる。それは又、「傍観して、じっとしていること」ができなかったからでもあろう。さらに又、彼がリーナ (Lena) に対して、救助の手をさしのべたのも、モリソンに対する衝動と同じものだったのである。¹¹⁾ リーナに対する感情については、Neville H. Newhouse の意見¹²⁾ に同感である。ヘイストはリーナと駆け落ちをし、サンビュラン島で二人だけの生活を始めるのだが、彼に好意を寄せているデヴィッドソン (Davidson) 船長の訪問を受け、その時に云つた言葉、

“The world is a bad dog. It will bite you if you give it a chance; but I think that here we can safely defy the fates.”¹³⁾

から考えても、人間社会に対する不信の念と、世間と隔絶された島での生活に、生きる意味を見出していたと思われるのである。

さて島に住み着く原因となったモリソンとリーナとのヘイストの関係は、助けられる者と助けるものとの単純な対比だけではない。モリソンは彼の言葉の端¹⁴⁾から考えられるように熱心なキリスト教信者であり、ヘイストは「神とは無関係」¹⁵⁾ だつたのであり、一方リーナは、人間の愛を信じており、リーナの倫理は、彼女のヘイストに対する信頼、すなわち、愛が彼女の倫理の基盤となっていたのであり、自己を犠牲にすることによって、愛するヘイストを救うことが、自分の使命であると考えたのである。¹⁶⁾ これはキリスト的な自己犠牲と呼べるものであろう。そして、この世捨て人で、人間不信の男、ヘイストに人間への愛を目覚めさせようと、リーナは試みるのだが、長い間の人間不信に対するヘイストの習慣がそれを拒むのである。しかしこの解釈とは異なる見方がある。すなわち、Palmer によれば

Jones and company break in on this dream at a promisingly creative moment, in the midst of Le-

na's "sudden and close embrace" with Heyst; and from this moment forward she is on the passionate defensive; but by this time her symbolic functions have been clear.¹⁷⁾

なのである。しかし、リーナが、リカードからナイフを取り上げることによってのみ、ヘイストを救うことができるのだと考えたのだが、ヘイストは彼女の行動も、愛も、彼女の生涯の最後の瞬間迄理解しなかつたと考える方が自然であろう。何故ならば彼女の今はの際に、

Heyst bent low over her, cursing his fastidious soul, which even at that moment kept the true cry of love from lips in its infernal mistrust of all life.¹⁸⁾

とある記述をもって明らかであろう。

ここで、リーナを奪われた宿屋の主人、ジョンベルグの陰謀にあやつられてサンビュランの島へやって来た三人の悪漢、ジョーンズ、リカード、ベドロに少し触れておかねばならない。この三人の中の頭領であるジョーンズは一見紳士を装い、反社会的と云う点では全くヘイストと同じ性質をそなえていたのだが、この点に関する Palmer の指摘は的を射ていると云わねばならない。すなわち、

— But it is important to see that the identity between Heyst and Jones is not exact; rather they are inverted images of one another. Heyst reflects, Jones merely broods; Heyst is drawn into action through loneliness or sympathy, Jones merely through fits of boredom; Heyst feels a kind of abstract love for Lena, but Jones feels only a pathological revulsion toward all women; Jones is physically effete, but morally resolute (in his own inverted terms), while Heyst is physically strong and resolute, but morally effete.¹⁹⁾

とは二人の対比を云い得て妙である。

そして又、このジョーンズなる人物はコンラッドの代表作 *Lord Jim* に於ける “Gentleman Brown” に酷似していることも注目に価する。しかしこの悪漢一味に、リーナの計略によって、裏切りが生ずるのである。それは、リーナを我がものにせんとしたリカードと極度に女嫌いの首領ジョーンズとの間に生じたものであった。又、リーナもヘイストの敵命をきかず、リカードと接触があったことをヘイストに打開せず、我が身を犠牲にしてリカードの短刀を奪おうとしたのであった。しかし、リカードの裏切りに気づいたジョーンズは、自分の身の危険を感じ、リーナと一語にいる

リカードをねらってピストルを発射するのだが、リカードの額をかすって弾はリーナの胸に命中するのである。一方、リカードはてっきりヘイスト撃たれたものと思い、あわてて森の中に逃げ込む。しかしヘイストの無事な姿を見たリーナは、自分が彼の役に立てたことを喜び、もうろうとした意識の中でリカードから奪った短剣を握りしめる。彼女のこの行為をモーフは次のように考えている。

She pays for her mistake (also an unconscious breach of faith) with her life.²⁰⁾

そして、勝利の喜びに包まれながら、リーナは息をひきとるのである。彼女の死後、彼等の住んでいたバンガローが燃え、その中からヘイストの死体も発見されるのだが、モーフによれば、彼の自殺は次のように解釈されている。

—and Heyst throws himself into the purifying flame in order to atone for his (and her) guilt.²¹⁾

確かにこの解釈は否定できないと思われる。ただ、彼（と彼女）の罪と云うのはヘイストが、リーナを連れ出して、サンブェランへ駆け落ちしたことを指しているのだが、少しく説得力に欠ける点があるように思われる。

さてこれ迄に、ヘイストを中心として登場人物の性格についての分析と共に、小説の筋も極めて大ざっぱに述べてきた。この辺で、この小説の持つ意味や、この作品を通してのコンラッドの思想に触れなければならない。

III

この小説の続後感としての第一印象は先づメロドラマと云うイメージが浮かんで来る。確かにコンラッドは一時期ではあったが、異国情緒豊かな海洋作家の名前を頂戴した事もあったくらいだから、これ又当然であるかも知れない。確かにリーナの犠牲的な死と、すべてを焼き尽して己れの命を絶ったヘイスト、そして昔ながらの姿にかえった平和な南海の孤島、といったシーンは正しくメロドラマ的であろう。しかし、ここで一步、それ迄に到るヘイストの性格、及びその心理を分析すれば、これは単なるメロドラマではない。一種の心理劇、しかも深刻な心理劇と云わざるを得ない。確かにヘイストの態度や、心理の中には深い心理的な真実があり、又それはコンラッド自身が感じていた真実であろう。この事に関するモーフの指摘には全く同感である。

How was it that the example of his father had not sufficed to keep him from throwing himself

from the bank of stoicism into the bustle of life, into adventures, hardships, into places from which there was no way back to the resolutions of his childhood, to the unfinished task of his father?²²⁾

コンラッドの幼い日々に起きた父親の流刑、母親との死別、短かった父親と共に過した日々が、彼に人生の夢や、争いの無益さに対する内なる警告を発する声となって響いたことであろうし、彼の若い情熱や、希望や、幸福への試みと云ったものを侮蔑するようになったとしても不思議でないであろう。「傍観せよ。事を構えるな」と教えたヘイストの父の教えは、正しくコンラッド自身への警告だったのでであろう。しかし彼の父や、彼を巻き込んでいった周囲の世界が、この上なく残酷に、非情に映ったものと思われる。ペインズの書いたコンラッドの伝記の次の一文を見れば容易に想像がつくのである。

On 23 May Apollo died; Conrad's grandmother described how, 'with bitter tears, he prayed for the soul of his father kneeling between the priest and the nuns, until at length Mr. Buszczyński took him away and pressed him to his heart. The funeral was made the occasion of a tribute by the people of Cracow to a man who had sacrificed his life to his conception of patriotic duty; Conrad walked at the head of the enormous procession. The ghost of this tragic figure was to haunt Conrad throughout his life.'²³⁾

故に、彼の幼年時代に、父と母と自分とを容赦なく巻き込み、苦しめた社会からの detachment (離脱) が、幼なかったコンラッドの念願であつたことは容易に考へられる。それが、又、逆に西欧的な秩序へのあこがれへと、なつたと不思議ではないのである。そして、彼がイギリス国籍を得て作家になつた時に、租国からの離脱が、一種の背信行為であつたと考えていたと云うことは、ペインズを始め、コンラッド研究者の定説となつていところである。この小論で、私が、involvement と detachment と云う点で、*Victory* と云う作品を眺めてみたかつたのも、ここに起因しているのである。

主人公ヘイストが、現実世界からの detachment を試み、父の教えを守ろうとしていたにも拘わらず、モリソンに手を出して、現実社会の中に巻き込まれ、又リーナに手を出して、その結果、三人の悪漢に襲撃されたことは、三人の悪漢に象徴的に代表されている現実社会に巻き込まれたことを意味するのである。そしてリーナの犠牲的な愛を知ることによって、ヘイスト

が死を選ぶのだが、ヘイストのこの行為は何を示しているのだろうか。罪に対する償いの気持からであると云う説は納得できるが、さらに、考えてみると、ヘイストの倫理の敗北を意味しているのではなかろうか。ヘイスト的倫理の敗北とは、人間不信、傍観的態度からの脱却である。人間信頼、すなわち、humanity への帰着を、コンラッドは示唆したものと考えるべきであろう。

又、サンビュラン島の事件を懸命に画策した宿の主人ジョンベルグこそ正しく傍観者だったのであり、島におけるヘイストの従僕である中国人のワンも又、傍観者であり、事件に巻き込まれることを断固拒否したのである。²⁴⁾ しかもこの傍観者である二人が、結局はヘイストとリーナを窮地に追いやった張本人であるとは、コンラッド流の irony であろう。

注

- 1) Joseph Conrad, *Victory* (Dent, 1946) p.vii
- 2) *Ibid*, p. x~xi
- 3) 伝記的記述については、コンラッド伝記の決定版とされいている Jocelyn Bains, *Joseph Conrad, a critical biography*, (McGrow-Hill, New York, 1967) を参照した。
- 4) Joseph Conrad, *op.cit.* P. 7
- 5) *Ibid*, p. 7
- 6) *Ibid*, p. 7
- 7) *Ibid*, p. 8
- 8) *Ibid*, p. 91
- 9) *Ibid*, p. 174
- 10) *Ibid*, p. 175
- 11) *Ibid*, p. 71~72
- 12) Nevill H. Newhouse, *Joseph Conrad* (Evans Brothers, London, 1966) p. 135
He comes across a girl (Lena) who is obviously being victimised. The fact of her misery so impresses itself on him that his abstract theory succumbs to the living reality: he could not defend himself from his compassion;
- 13) Joseph Conrad, *op.cit.* p. 57
- 14) *Ibid*, p. 17
- 15) *Ibid*, p. 17
- 16) *Ibid*, p. 201
She felt in her innermost depths an irresistible desire to give herself up to him more completely, by some act of absolute sacrifice.
- 17) John A. Palmer, *Joseph Conrad's Fiction* (Cornell u. p. New York, 1968) p. 178
- 18) Joseph Conrad, *op. cit.* p. 406
- 19) John A. Palmer, *op. cit.* P. 178
- 20) Gustav Morf, *The Polish Heritage of Joseph Conrad*, (Haskell House, New York, 1955) p. 178
- 21) *Ibid*, p. 178
- 22) *Ibid*, p. 178~179
- 23) Jocelyn Bains, *op. cit.* p. 24
- 24) Joseph Conrad, *op.cit.* p. 348

(昭和46年1月9日受理)

